

差延の二重のコスモス
——デリダにおける言語使用の秩序——

東京大学 石原威

序

ジャック・デリダは、「差延」や「脱構築」など独自の読解格子で様々な哲学テキストの読解を行った。それは、言語の意味が純粹に存在することの不可能性、そして言語を通じて共有される様々な理念（正義、道徳、自由など）が純粹に存在することの不可能性を暴くものであったため、彼の理論はしばしば、あらゆる価値や理念を相対主義に解消しようとする破壊的なものとみなされ、批判されてきた。しかしデリダ自身の目的はむしろ、意味や理念の純粹性が初めから不可能であるという認識から出発して、なお我々がそれらについて考えることの意義を提示し直すことにあった。

我々が必要としているのは、理念性、意味作用、意味、指示物といった「諸効果」を、ある差異的なシステムに即して、別様に規定することです。(PO, p.90)

本論文ではこのデリダ自身の問題意識に照らして、我々が日常的に語を状況に応じて適切に使い分け、意味を認識しコミュニケーションを取る、というある程度安定的な言語使用を行っているという事実が、差延の働きを踏まえた上でいかに説明されるかという問いに取り組む。そしてそれが、**差延が機能するために必然的に内包しなければならない二重の安定化装置（コスモス）**によるものであることを示す。具体的には、まずデリダが用いた「差延」や「散種」などの概念相互の連関を図式的に整理した上で、差延における二つの「エコノミー」の構造を明確にする。その過程で差延の一段階目のコスモスが取り出される。しかしそれだけでは我々の日常的な言語使用のあり方の説明には不十分であることを確認した上で、彼のライブニッツ及びフロイト読解を参照し、差延に内在する二段階目のコスモスを取り出すという順で議論を進める。

1. 差延の構造

デリダは、マーク⁽¹⁾が自律的に存在する意味を伝達するための媒体であるという見方を批判する。彼のマークに関する議論を辿ろう。彼はソシュールの理論を参照しつつマークの働きについて説明する。ソシュールは『一般言語学講義』において、言語がシニフィアン（意味するもの、記号）とシニフ

イエ（意味されるもの、意味）との組み合わせからなるものであり、その組み合わせは恣意的であること、そしてそれらが実は他のシニフィアン・シニフィエとの差異によってのみ規定されうる、実体のないものであるということを描いた。結局ソシュール自身はシニフィエの根源のようなものとしての「超越論的シニフィエ」を想定し（宮崎, p.49）、意味の次元の再確保に走ってしまうのだが、デリダは次のように述べる。

一切の概念は権利上かつ本質上或る連鎖ないし或るシステムの中に書き込まれており、それらの内部において、諸差異のシステムティックな戯れによって、他なるものへ、他なる概念たちへ送り返す。
(MP, p.11)

マークの意味（概念）は、常に他のマークの意味に無際限に回付されてしまう。意味それ自体など存在せず、相互に異なるマーク同士の参照の連鎖による意味の確定の無限の先延ばし、差異づけの連鎖だけがある。この「差」異づけられながら遅「延」し続ける運動が、「差延 [différance]」と名指される。マークを記入するということは、既存の意味をそれにより伝達することではないのだ。或る論文で、デリダは次のように述べている。

それはまた、書くことに対し意味を絶対的に先行させるのは不可能だということだ：そうして意味を引き下げ、同時に記入を高めるのである。(ED, p.21)

だがそうすると、我々は表現対象を持たない記号を闇雲に書きつける他ないということにならないか。一個一個の記号は物理的には異なるものなのだから、我々は記入のたび意味もなく新しく生み出される記号のカオスの中生きる他ないのだろうか。

デリダは次のように考える。マークは、それが用いられる様々なコンテキストにおいて「同じ」ものとして認識されうる限りにおいて、マークとして機能できる。「口調、声、等々、場合によってはある種のアクセントの経験的な多様性を貫いて、いわばシニフィアン形式の同一性を再認できるのでなければならない」(MP, p.378)。同一的な [identique] 意味を表現する媒体というマーク観を廃してなお、多様なコンテキストにおいて用いられるマークの間に見出される不安定な同一性を、デリダは「同じ性 [mêmeté]」(ibid, p.392) と名指している。或るコンテキストのこのマークが、他のコンテクス

トのあのマークと「同じ」だとされることに根拠はない。その点、記入は無根拠なものである。だがそれは新たなマークを野放図に生み出すというよりは、私が今から記入するこのマークがあのマークと「同じ」ものとして解釈できるのだと、一方的な宣誓によって決定し通用させることなのである。

このように、マークは現実のコンテクストにおいて他のマークと差異づけあい、意味の確定を無限に遅延されつつも、アドホックに「同じ」ものとして解釈される。差延のこの側面を、**現実的差延**と呼ぼう。現実的差延は現実化したあらゆるコンテクストの間で起こる差延である。同じものとみなされたかつての自身との間でもそれは起こる (ibid, p.18)。

さて、この同じものという発想は次のことも含意する。マークは、それが未来のコンテクストにおいて同じものとして記入されることで、その解釈を更新される可能性に常に開かれ続けているということだ。

現前性の舞台に現れる「present」と言われる各要素が、自身以外の他のものに関係し、自己の内に過去の要素のマークを保蔵し、未来の要素との関係のマークによって既に穿たれるに任せている、そのような場合にのみ意味作用の運動が可能になるよう仕向けるのが、差延である。(ibid, p.13)

マークは、未来において同じものとして通用する自身の可能性との間でも差異づけあっている。これもまたマークの意味の確定を無限に遅延させ、記入のたび差異化する差延の運動である。可能性の次元における差延のこの働きを、**可能的差延**と呼ぼう。差延とは、この二種類の差延が不可分に絡み合う運動のことなのである。或るマークが記入された瞬間、現実と可能性を横断する無限の回付運動が駆動し、その超高速擦過の中に我々は意味の蜃気楼を見るのだ⁽²⁾。

2. 反覆可能性と散種

デリダは、その意味の蜃気楼の正体についても考察している。マークがマークとして機能するための条件として、彼は「反覆可能性 [itérabilité]」という概念を導入する。

この反覆可能性 ([...] 反復を他性に結びつけるこのロジック [...]) は、それがいかなるタイプのエクリチュールであれ、エクリチュールのマークそのものを構造化している。[...] 受け手の死を超えて構

造的に読解可能——反覆可能——でないようなエクリチュールは、エクリチュールではないだろう。(ibid, p.375)

反覆可能性とは、自己同一的意味を持つマークの純粹な繰返しとしての「反復 [répétition]」を「他性に結びつけ」る、すなわちそれが行われるたびマークを他化していくような「反覆 [itération]」の可能性である。マークはたとえ歴史上一度しか用いられずとも、他のコンテクストに記入され差異づけられる可能性に構造的に開かれていなければマークとして機能し得ない。すなわち、マークは無限の反覆可能性を持つのでなければ機能し得ない。

すべての記号は、所与のいかなるコンテクストとも手を切り、絶対に飽和不可能な仕方で、無限に新たなコンテクストを発生させることができる。[…]マークの[…]この反覆可能性[…]。(ibid, p.381)

記入とは、マークの解釈を無根拠に定立することであった。それは、そのマークを或る仕方で解釈可能にするコンテクストを生み出すということだと言える。ゆえに、マークが生み出し得る無限のコンテクストとは、そのマークの無限の反覆可能性に等しい⁽³⁾。前節の可能的差延はまさにこの事態を指している。そしてこの反覆可能性群こそ、マークの意味と認識されるものの正体なのである。ただしこの「無限」は、潜在的 가능성이「無限個ある」という実無限的な事態を単に意味するのではない。差延の無限は、無限の先送りという可能無限的な事態をも指示している。その無際限はマークの記入なしに駆動しない以上、マークの一回の有限な記入が無限を集約していることになる。「無限な差延は有限」(VP, p.120)である。すなわち、互いに差延し合う反覆可能性の無限は、回付の無際限性が有限な現れの中に凝縮された、実無限的可能無限とでも言うべき矛盾した無限なのである。

さて、このような反覆可能性は、そのものとしては一度も実現することはないということが極めて重要である。図1を見よう⁽⁴⁾。例えば、マークAがコンテクストBにおけるマークA'(Aと「同じ」もの)として反覆されるという反覆可能性を持っていると述べた瞬間、Aはすでにβに記入され、マークA'になってしまっている⁽⁵⁾。A'はβにおいて差異の規定を獲得し、新たな反覆可能性群に貫かれているので、「Aの反覆可能性としてのA'？」自体はもう存在しない。A'？は、潜在的なコンテクストβ？に留まる限りにおいてAの反覆可能性たりうる。A'？そのものについての認識は、AとA'の間の現実的差延によって妨げられてしまうということだ。つまり、マークが反覆さ

れ得る可能世界を無数に持っており、そのうちの 하나가選択・実現されるというわけではないのである。

では、反覆可能性とはいかなる可能性なのか。デリダは、フロイトが無意識の作用を説明する際に用いた「事後性 [Nachträglichkeit]」と差延の遅延化作用の親近性を念頭に、差延とは「事後」的にやって来る、「かつて現在であったためしのない、そして今後も決して現在であることがないだろう、そうした「過去」に関わるものだと述べている (MP, pp.21-22)。これを踏まえて次のように言えるだろう。**反覆可能性は、記入が事後的に生じさせる過去なのである。**すなわち反覆可能性とは、記入の瞬間生じる、そのマークを「他の仕方でも反覆し得た」という遅すぎた、喪われた可能性、定義上一度も現実化しない絶対的過去なのだ。マークが記入のたびこのような無限の反覆可能性に貫かれる作用を、デリダは「散種 [dissémination]」と名指している。

散種は非有限数の意味論的諸効果を産出するため、単一の始原的現在にも連れ戻されるままにならないし、単一の終末論的現前にも連れ戻されるままになりません。散種は或る還元不可能で、生産的な多数性をマークしているのです。(PO, p.62)

マークは無限の反覆可能性を散種する。そしてその過去は、同時に未来的でもある。**別様にも反覆し得たという可能性は同時に、今後それが別様に反覆され得るという未来の可能性でもあるがゆえにマークの機能を可能にする。**絶対的過去は、遅ればせに到来する「来るべき未来 [à venir]」の経験でもあるのだ (SM, p.16)。デリダは、未来と過去が奇妙にも通底するこの時間性を「錯時性 [anachronie]」(ibid, p.26) と呼ぶ。

言語の意味は、認識不可能な無限の反覆可能性に散種されている。これは非常に破壊的な議論に見えよう。ジャコブ・ロゴザンスキーが述べるように、差延・散種のこの「流動するカオス」においては「非定型で増殖する塊、堆積、いつも自らを分解しかけている不安定な集まり」しかあり得ず (Rogozinski, p.122)、言語を安定的に使用するなど到底不可能なのではないかと思える。しかしロゴザンスキーは、実はそうではないと言う。差延は、差延自身が可能であるためにも「存在しない「真理」」を必要とする (ibid, p.125)。差延は、それが破壊するはずの現前的「真理」、イデア的意味を、あたかもマークが持つかのような「ふりをする」ことなしに働き得ないというのだ。デリダが差延の二つの「エコノミー」と名指すものを確認し、この事

態の説明を試みよう。

3.二つのエコノミー

デリダは「差延」と題された論文で、差延が持つ「限定エコノミー [l'économie restreinte]」と「一般エコノミー [l'économie générale]」という二つの作用に言及している。

私は […] 留保なき消費、死、非意味への晒し等々に全く分け前を与えない限定エコノミーと、非-留保を計算し、こう言えるなら非-留保を留保するような一般エコノミーとの関係づけを試みた […]。採算の取れる差延と取れない差延の関係、絶対的損失・死の出資と混ざり合う、純粹で損失なき現前の出資。(MP, pp.20-21)

これらはいかなるものだろうか。前者には、特定の目的や理念に収束していくようにあらゆるものを意味づけする、ヘーゲル的な目的論が対応する(ED, pp.398-399)。マークの構造に照らして考えてみよう。現実的差延によりマークは新たな規定を獲得するのだった。マークは他のマークとの差異によってのみ規定されるのだとすれば、一層差異化することは逆説的にも、より多くの規定を獲得しマークを「イデア化」すること、つまりそのマークの意味を絞り、確定していくことでもあると言える。

シニフィアンは他のシニフィアンに、すなわち差異の戯れによってさらに価値を増した別の関係を、欠けた現前との間で維持するような他の種類のシニフィアンに入れ替わる。さらに価値を増すのは差異の戯れがイデア化の運動だからであり、シニフィアンがイデア的であればあるほどその現前の反復力を増大させ、一層意味を貯蔵し、留保し、資本化するからである。(VP, p.104)

マークは記入のたび現実的差延により新たな規定を獲得し、「意味の資本」を留保する。それは自己同一的で、無際限な反復が可能なイデア的意味を持つマークへと、「同じ」ものが漸近していく運動である。差延のこの目的論性が限定エコノミーと呼ばれる。

では一般エコノミーとは何か。デリダはバタイユを論じた論文において、彼が用いた「至高性」という語に注目し次のように言う。

諸概念は〔…〕ある点において至高性の契機に、自身らの意味の絶対的喪失に、留保なき消費に関係づけられる。(ED, p.393)

至高性とは「意味の絶対的喪失」のことである。それは、絶対的に意味を欠くため認識不可能である。ゆえに至高性の「効果」を描出しその次元を予感させてくれる、意味の喪失との「関係」としてのエクリチュールが問題となる。そのようなエクリチュールが一般エコノミーなのだ (ibid, p.397)。これは、非有限数の意味論的諸「効果」を産出するとされた散種と、全く同一の事態を指していると言えよう。マークは無限の反覆可能性へ自己の同一性をばら撒くことでしかマークとして機能し得ない。それらは一度も実現したことがないし、今後も実現しない潜在的可能性、すなわち現実化に失敗したある種の「喪失」としか考えられないものである。そのように喪失されたものは「非-知」、つまり認識不可能なものでしかないのだが、マークは一般エコノミーのはたらきにおいて、そのような非-知の次元の意味作用の効果を描き出す。マークの持つ同一性、すなわち限定エコノミーが留保する意味の資本が、喪失され認識できない匿名の反覆可能性たちへ留保なく支出されている事態が、一般エコノミーであり散種なのである。

さて、これら二つのエコノミーが相互依存関係にあるということに注目しよう。マークは意味の資本を貯蓄しておくことなしに支出するものを持たないゆえに、限定エコノミーは一般エコノミーの可能性の条件である。しかしマークが留保を行いマークとして機能することができるためには、そのマークはすでに無限の反覆可能性に開かれていなければならない。ゆえに、一般エコノミーもまた限定エコノミーの可能性の条件である。マークは、アイデア性へ向け意味の資本を留保すると同時に留保なく支出するという、矛盾した共存の上に構成されている。意味のアイデア性は可能になると同時に不可能になるのだ。

反覆可能性はアイデア化を——したがって、多様な事實的出来事から独立した一定の反復可能な同一性を——可能にするが、それが可能にするアイデア化そのものに制限を加えもする、つまりアイデア化を「開始しながら損なう [entame]」のである。(LI, pp.119-120)

アイデア的同一性を「同じ」ものの奥に透かし見ながら行われる無根拠な記入は、この限定エコノミーによって可能になるのだと言えよう。ロゴザンスキーはまさしく、差延におけるこのような限定エコノミーの不可欠性を指摘

していたのだ。デリダ自身、一般エコノミーがそれを直ちに制限するとしても、記入が意味を志向すること自体は「超越論的錯覚」の如き不可避の事態であると述べている（PO, p.45）。純粋な意味と同様、純粋に破壊的な差延もあり得ない。この限定エコノミーを**差延の一次コスモス**と呼ぼう。イデアの反復を志向する無根拠な記入が二つのエコノミーを一挙に駆動し、それらは相互に可能にし合い汚染し合いながら、一次コスモスという最低限の秩序を確保するのである。

4.意味作用の闘争と通道

しかし以上の議論は不十分なものに留まる。一次コスモスは確かに、マークにおける意味的なものの次元を担保し、差延が純粋に破壊的なものでないと示してくれた。しかしそれだけでは記入が無根拠なものであることに変わりはなく、我々の言語使用において「或るマークはこの意味で、他のマークはまさにあの意味で記入されやすい」という傾向性の差が存在する理由は説明されない。マークごとに記入されやすい意味の違いがあるというこの秩序、安定性が何に起因するのかについて、さらに分析を進めよう。

そこで、「力と意味作用」における次の記述に着目したい。

ところで、純粋なパロールは記入を要請するのではないだろうか。

ライブニッツの本質が存在を要求し、現勢態へ向かう潜勢態のごとく、世界へ向けて押し寄せていくのと、少し似た仕方で。(ED, p.18)

この記述を解釈するため、記入との類似性が示唆されているライブニッツの理論を確認しておこう。彼は、なぜ或るものが無いのでなくて在るのか、そしてなぜ世界はこのように存在するのであって他の仕方で存在するのではないのかという、世界の存在に関する充足理由の問題に取り組んだことで知られる。「事物の根本的起源」の中で彼は次のように述べている。

無でなしにむしろ何かが実在するということからみて、可能的なものあるいは可能性、または本質そのもののうちに、何か実在への要求、[いわば] 実在への抱負がある [...] 可能的なものあるいは本質的なもの、または「可能的な実在性を表現しているもの」は、本質ないし実在性の量に応じて、またはそのふくむ完全性の度合に応じて、同じ権利で実在へ向かう。(ライブニッツ, p.206)

神は、無数の可能世界の中から最善の世界を選択し実現する（同上書、p.21）。最善の世界とは、実在性の度合に応じて存在を要求する諸可能性が最も多く実現されるような「可能的系列」である（同上書、p.206）。そして、或る世界において矛盾なく共存可能な諸々の存在が「共可能的[compossibilia]」と言われる（同上書、p.208）。ライプニッツは実現された各々の存在をモナドという一種の原子と考えていたことに鑑みれば、神が創造した最善の世界とは、共可能的なモナドの最密充填構造だと表現できよう。ところで、デリダは次のように書いていた。

可能な意味作用たちはある種の自律的な重層的-共可能性 [sur-compossibilité] において、予期できない仕方で、私の意に反するかのごとく、互いに邪魔し合いながらも呼び合い、また惹起し合う。その共可能性は純粹な多義性の潜勢力であり、この視点からすれば、古典的な<神>の創造性もいまだあまりに貧弱なもののように見える。（ED, p.18）

マークの意味の正体は無限の反覆可能性なのであってみれば、「意味作用」とは反覆可能性のことと考えられよう。反覆可能性たちは、自身をそのものとして実現できるコンテクストの創造を求め「邪魔し合」うが、互いが互いの差延でしかあり得ない以上、「呼び合い、また惹起し合」いもする。それらは無限の潜在的可能性、「多義性の潜勢力」であり、「実在性の量」に応じて現実化を求め世界へ、記入による現実化の方へ「押し寄せていく」。すなわちマークとは、互いに異なる実現可能性の度合いを持ち、それに応じて実現を求める無限の反覆可能性の闘争の場なのである。「ライプニッツ的本質」におけるのと似たこの闘争を記入が引き起こすのだ。

無論それは類似にすぎない以上、明確な相違もある。ライプニッツの神は、すでに見通された可能世界の中から最善のものを選択するだけである。しかし先述の通り、デリダは可能世界の先行性を認めない。先行するのは記入である。マークは、無限の矛盾をうちに孕み「重層的-共可能性」を持つ意味作用たち、差延し合う錯時的反覆可能性たちの闘争の中で読まれるのだ。それは、無矛盾で共可能的な最善の世界を統べるだけの「貧弱」なライプニッツの神には計算不可能なほど複雑である。

さて、反覆可能性の間には現実化を求める力の差異があることが分かった。続いてデリダのフロイト読解を参照し、その差異が構成されるプロセスを分析しよう。

デリダは、フロイトが初期に執筆した『科学的心理学草稿』に登場する「通道 [Bahnung]」という概念を分析している。人間の心のメカニズムを説明する際、フロイトは困難に直面していた。人間は常に新たな知覚を得つつ、記憶も同時に保持している。心の機能の説明は、一方で新しい知覚の受容に開かれていながら、他方でニューロンが受け取った知覚刺激の痕跡、つまり記憶を留めてもおけるという難題に直面するのである (ibid, p.298)。これに対し『草稿』のフロイトは ϕ ニューロンと ψ ニューロンの区別を導入し、前者が知覚を、後者が知覚刺激の「量」の通過の「痕跡」を保持することで記憶を担うのだと考えた。刺激を透過させる ϕ と異なり、 ψ は侵入してくる刺激に抵抗することで痕跡を残す。この刺激が跡付ける道が通道と呼ばれる。この通道の間には「選り好み」、つまり通りやすさの差異がある。

通道に対する抵抗がどれも等しい、あるいは通道のための力がどれも均衡している状況は、道順の選択における一切の選り好みを消してしまう。そうなれば記憶は麻痺するだろう。通道間の差異、これこそ記憶の、またそれゆえ心の真の起源である。この差異のみが「進路の選り好み」 (*Wegbevorzugung*) を解き放つのだ。(ibid, p.299)

痕跡は、通道の差異のみを保持している。通道とは内実のない「間隙 [diastème]」に仮に与えられる名前であり (ibid, p.305)、あるのはむしろ通道の差異だけだからだ。通道の差異の存在が、状況に応じて特定の記憶が呼び覚まされやすくすることを可能にし、記憶を機能させる。そしてそのような通道の差異は、刺激の量および反復の頻度によって規定される (ibid, p.300)。刺激の侵入が繰り返されるたび痕跡が更新され、新たな通道の差異の布置が生まれるのだ。そして次のように言われる。

痕跡の産出におけるこうした差異の全ては、差延の諸契機として再解釈され得る。[...] 脅威となる消費や現前は、通道あるいは反復の手を借りて延期されるのである。(ibid, p.300)

通道は刺激に対する抵抗という遅延作用であった。それゆえ通道の差異は差延の機関なのであり、反復がその布置を規定する。ところで我々は既に、差延が生む反覆可能性が無際限の遅延作用であること、またその各々が実現可能性の度合いの差異を持つことを見た。ここで次のように言えないだろうか。通道の差異とは、**反覆可能性たちの間の「反覆のされやすさ」の差異**を

意味すると。刺激の反復が痕跡として通道の差異を記憶に刻印するように、マークが経てきた（反復を志向する）記入の歴史が、反覆可能性の間の反覆のされやすさの差異を錯時的過去に刻印する。そして反覆可能性たちはその反覆のされやすさに応じて、「私を記入（実現）せよ」と呼びかけ、次なる記入を方向づけるのだ。反覆のされやすさの差異という、一般エコノミーに内在するこの偏り、傾向性こそ**差延の二次コスモス**と呼ぶべきものである。デリダは通道に **frayage** というフランス語をあてているが、例えば少し後の時期の著作では、その動詞形である **frayer** を用いて次のように述べている。

円柱は存在せず、散種の通路以外の何ものでもない。円柱は燃える空気のように透明で、テキストはそこに道を拓く [se fraye]。種子的なテキストによって拓かれた過程。(DS, p.427)

通道の差異とは、まさに散種に刻まれる通路の間の通りやすさの差異なのだ。この二段階目のコスモスが担保されることで、マークの記入の傾向性の差異という我々の言語使用の秩序が説明されるのである。

結論

我々は、差延が二重のコスモスを内在させることでのみ機能しうることを見てきた。マークが限定的な意味作用を持つことを可能にする限定エコノミー（一次コスモス）、そしてそのような意味を喪失させる一般エコノミーに内在する偏りの布置（二次コスモス）。この二重の安定化装置によって、差延はただ意味や理念を破壊するだけの作用ではあり得なくなるのである。

この議論は、デリダによるフッサール批判とも軌を一にしている。初期のデリダは、目的論的に志向される理念的意味の純粋な現前を前提し、そのような意味を引き受ける主体にとって志向は「能動的」に、すなわち完全に「自由」に行うことが可能なものである、と考えたフッサールを批判した（IOG, pp.100-101, pp.166-168）。デリダは次のように述べる。

それらは意味であるかぎり、あらゆる現在の意識のうちに構造的に含まれている過去の意識が、その固有な諸連鎖によって結びつけられているような事実的世界のある一定の秩序をマークされていないだろうか。(IOG, p.96)

目的論的に志向される意味は、常にすでに記入の歴史（「事実的世界のある

一定の秩序」)を刻み込まれている。すなわち、一次コスモスにおいてアイデア性を志向しつつ無根拠になされる記入は、記入の歴史の堆積によりその布置が決定される二次コスモスによって、常にすでに方向づけられてしまっている。このとき、記入の無根拠さ＝「自由」の純粹性は疑わしいものになる。

では、記入は完全に方向づけられているのだから自由をそこに見出すのは単なる誤りだと言えるか。そうではない。すでに我々は、マークの記入が生み出す反覆可能性群は事後的なものでしかないことを確認した。それらは、記入に先行しそれを方向づける単なる可能世界群ではない。もしそうでしかないなら、デリダのマークの理論は結局、確率論の域を出ないことになるだろう。確かに反覆可能性群はなんらかの仕方でマークの次なる記入に作用しているのだが、他方で新たに行われる記入はやはり、それをほみ出す過剰としての無根拠さをも持っている。記入は、二次コスモスに束縛されながら同時に全く自由でもある。

書かれた記号は、そのコンテクストと断絶する力、すなわち、その記入の瞬間を組織する諸現前の総体と断絶する力を含んでいる。この断絶力は偶然的な述辞ではなく、書かれたものの構造そのものである。(MP, p.377)

コンテクストからの「断絶力」、それはまさしく記入の無根拠さ＝自由であろう。2節の引用においてもすでに、「所与のいかなるコンテクストとも手を切」ることがマークの構造に属すると述べられていた。本論に照らして言えば、記入はもはや「諸現前の総体」のみならず、差延の働きの総体からすら断絶し逃れさっていく。というより、差延の働きの総体など観念しようがない(そう考えた瞬間我々はライブニッツの方へ逆戻りすることになる)ことに鑑みれば、そのような断絶の契機こそまさしく差延的なのであるとも言えよう。歴史的堆積による方向づけと、そこから逸脱し断絶する無根拠な跳躍。この矛盾した事態が共存するばかりでなく、相互に条件づけあい協働してさえいるという不可解さそのものが差延なのである⁽⁶⁾。

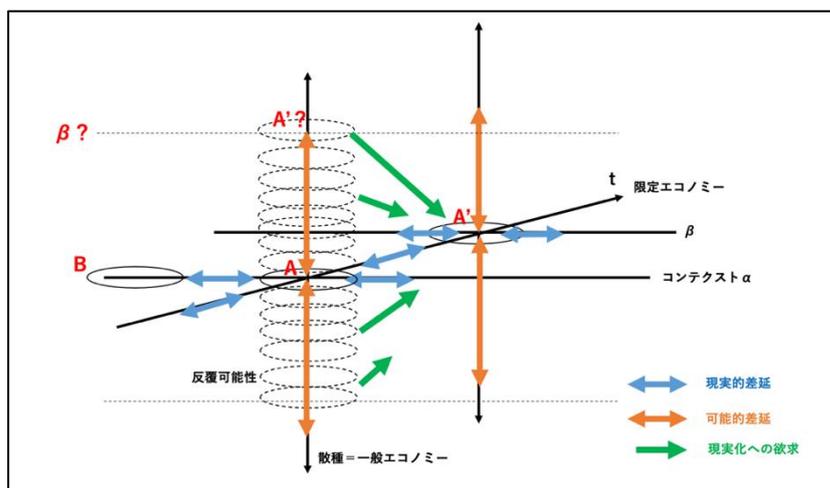
後年のデリダは、決断するという行為に関して次のように説明している。

なぜ狂気かという、このような決断は、行き過ぎなまでに積極的に行為することであると同時に、何もせずに受け入れることでもあるからだ。(FL, p.58)

マークの記入についても同じことが言えよう。過剰なまでの行為遂行性と、歴史性の全き引き受けとの協働が織り成す決断的自由の構造について、差延の二重のコスモスという読解格子を踏まえつつ、さらに詳細に分析することが今後の課題となるだろう。

注

- (1) **marque**。本論文では「記号」とほぼ同じ意味の語として用いる。
- (2) 当然、現実と可能性の二項もまた差延しているので、截然と区別はできない。それでも両者が差延において何らか質的に区別される二極と見做されうる理由については、別途論証する必要がある。
- (3) もっとも、他のマークとの影響関係を考慮すれば、或るマークが全く自由にコンテキストを創造できるということはない (LI, p.149)。
- (4) 図 1



- (5) 記入は必ずしも物理的な記入行為だけを意味しない。マークは他のマークと差異づけられただけで、そのマークとして記入されたことになる。マークが二度素早く読まれるその間でも記入は起こっている。
- (6) 本論の説明は、図式的理解を標榜するあまり差延を何か同一的・統一的な働きとしてイメージさせてしまう恐れがある。「差延」という語で名指される同一の働きがマークの根底にあるのではない。差延自体が、「差延的代替の連鎖の中へ絶えず脱臼していく」(MP, p.28)。差延の中でそれ自体差延する差延は、それが起こるたび決定的に新しい働きなのである。

文献表

ジャック・デリダの著作については、以下の略号を用いて本文中で箇所の指示を行なった。IOG はフッサールの著作であるが、本論文ではデリダがそ

れに付した序文を扱っているので、デリダの著作と併記する。

Jacques Derrida

I OG: Edmund Husserl, *L'origine de la géométrie*, traduction et introduction par Jacques Derrida (1962), Presses universitaires de France, 2010. (エドムント・フッサール、ジャック・デリダ序文『幾何学の起源』田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、1983年)

VP: *La voix et le phénomène* (1967), PUF, 2021. (『声と現象——フッサール現象学における記号の問題への序論』高橋允昭訳、理想社、2003年)

ED: *L'écriture et la différence* (1967), Seuil, 2014. (『エクリチュールと差異』谷口博史訳、法政大学出版局、2022年)

DS: *La dissémination* (1972), Seuil, 1993. (『散種』藤本一勇・立花史・郷原佳以訳、法政大学出版局、2021年)

MP: *Marges de la philosophie*, Minuit, 1972. (『余白』(全二冊)、高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、2007-2008年)

PO: *Positions*, Minuit, 1972. (『ポジション』高橋允昭訳、青土社、1981年)

LI: *Limited inc.*, Galilée, 1990. (『有限責任会社』高橋哲哉・増田一夫・宮崎裕助訳、法政大学出版局、2020年)

SM: *Spectres de Marx*, Galilée, 1993. (『マルクスの亡霊たち』増田一夫訳、藤原書店、2007年)

FL: *Force de loi*, Galilée, 1994. (『法の力』豎田研一訳、法政大学出版局、1999年)

その他の著作は以下の通り。

外国語文献

Jacob Rogozinski, *Faire part: cryptes de Derrida*, Editions Lignes, 2005.

日本語文献

宮崎裕助『ジャック・デリダ——死後の生を与える』岩波書店、2020年

G・W・ライプニッツ『モナドロジー 形而上学叙説』清水富雄・竹田篤司・飯塚勝久訳、中央公論新社、2009年